

カトリック 仙台教区報

2016年11月6日 No.232
発行
カトリック仙台司教区
〒980-0014
仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任 広報委員会
URL <http://www.sendai.catholic.jp/>



いつくしみの特別聖年

2015・12・8～2016・11・20

「いつくしみはとこしえに」。これは、神の啓示の歴史を物語る詩編 136 の各節で繰り返されることばです。いつくしみのゆえに、旧約のすべての出来事は、救済の深い力で覆われています。いつくしみは、イスラエルとともにある神の歴史を、救いの歴史にしました。詩編のように、「いつくしみはとこしえに」と、たえず繰り返すことは、愛という永遠の神秘の中ですべてを結ぶためには歴史のなかだけでなく、空間と時間の枠を壊そうとしているかに見えます。それは、人は歴史の中だけでなく、永遠に御父のいつくしみのまなざしのもとにあり続けると告げるようなものです。

(いつくしみの特別聖年大勅書 7)

という状況になってきました。信仰の一番の中心は神様の礼拝で、それが力の源です。ミサが行われなくなった場合でも信徒の皆様が集まって一緒に神様をたたえる集衆祭儀を大事にしたい。

小野寺洋一師を議長として、議事に入り、第1議案「2017年度仙台教区

の数は少なく、主日のミサに3回、4回と走りまわるのは限界を過ぎている



宣教司牧評議会

思います。今日の宣教司牧評議会の会議でそれを確認しながら手を携えて進んでまいりましょう」と挨拶した。

採決の結果、提案通り可決し、各地区ごとに持ち帰り、来年の司牧評議会へ

2017年度教区研修会テーマは「集会祭儀」 宣教司牧評議会定例会

仙台教区宣教司牧評議会定例会は、9月22日(木・秋分の日)仙台教区センターで開催された。議題として、2017年度仙台教区研修会テーマについて、施設整備協力制度要綱の改定が取り上げられた。

開会に当たり、平賀司教から、「仙台 また、台風10号で久慈教会は大変な被害を受けました。ほとんど改築に近い

必要がある。再度、研修テーマとして改めて「集会祭儀」をとりあげたい。

研修会テーマについて宣教司牧評議会役員上野隆氏(第5地区)より提案理由の説明があった。

生命の泉

秋は静かに降る雨やいつ果てるともなく続く雨だれの音、肌寒さ感じさせる風の音、枯葉の舞い散る単調な響きに人は内省的な気持ちになる▼秋には、あわただしく過ごしてきた春、夏がどんな実りをもたらしたか、人生

の秋にはこれまで生きてきた意味を問い直す▼昨年の暮れ、川崎の老人ホームで元職員の手で3人の入所者が4階ベランダから投げ落とされた。6月には相模原の障害者施設で19人の入所者が惨殺された。また横浜の病院で消毒剤を混入した点滴液で入所者2人が亡くなった。この病院の4階では7月以降わずか3ヶ月の間に50人が死んだという。院長は言う「少し多いかなと思つた」▼人の終わりに「四終」(死・審判・天国・地獄)ありと教えられている▼障害者や高齢者の存在は現代の人生観を見直すように迫る。▼第2ヴァチカン公会議で「復活秘儀」という概念が強調されて聖堂正面の十字架が復活のイエス様に架け替える教会が増えた。復活が私たちの救いであるとしても磔刑像の十字架はいつも私たちに語りかけてきた▼アメリカの霊能者は死んでも神の国に相応しくなかった靈魂は無私の行いによって浄化されるまで何度もこの世に戻って償いを果たさなければならぬと説いている(メアリー・ブラウン)が私たちに輪廻の教えはない。十字架でのイエスの死を忘れるとき、自分の抱えている悩みや苦しみは意味を失い、耐えがたいものとなり信仰を失う▼「直葬」とか「0葬」というのは自分の生きえを消し去ろうとしている現代人の苛立ちではないか。▼「私たちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません」(ロマ書14・7)生きてきた証は残された人に生きる勇気を与えるものでなければならぬ▼死者を麗々しく演出して社会的なイベントとしてしまう業者の手に委ねてはならない。(守)



「いつくしみの特別聖年 閉幕近づく」

司教 平賀徹夫

昨年12月8日、教皇フランシスコによってバチカンの聖ペトロ大聖堂の聖年の扉が開かれ、「いつくしみの特別聖年」が始まりました。目的は「わたしたちのまなざしをもっと真剣にいつくしみへと向け、わたしたちが御父の振る舞いを示す効果的なしるしとなるため」(『大勅書』3)でした。特別聖年は間もなく、11月20日「王であるキリストの祭日」をもって閉幕となります。(閉幕式の典礼日程では、「聖年は2016年11月20日、王であるキリストの祭日にバチカンの聖ペトロ大聖堂の聖年の扉を閉じることによって閉幕するが、地方教会では、それに先立つ11月13日、年間第33主日に、聖年が閉幕することになる」との指示が出ています。)

この特別聖年のこれまでの間、わたしたちは、御父がいつくしみ深いように(子であるわたしたちも)いつくしみ深く生きる者となるように、いつくしみの現れそのものであるイエス・キリストをより注意深く見つめることに努めてきました。父なる神のいつくしみに気づき、感謝し、称えながら、世に対してわたしたちがそのしるしとなれるようにと祈ってもしました。もちろんわたしたちのこの務めは特別聖年に限られたものではなく、その後もずっと続けるべきものであることは当然ですが、特に今、この終わりのひと月、救いに不可欠であるそのいつくしみを、信仰の目をもってあらためて確認し、味わうことに努めたいと思います。

そのことのために教皇フランシスコの使徒的勸告『福音の喜び』(カトリック中央協議会、2014年)は大いに役立つと思います。そしてまた、この特別聖年の間に日本語訳の刊行が成った、教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シーとともに暮らす家を大切に』もありますし、これと同調するように日本カトリック司教協議会による『今こそ原発の廃止を—日本のカトリック教会の問いかけ』も発表されました。これらもぜひ読みたいと思います。

で悲しい出来事。滝田さんには教区報に「神は愛なり」で寄稿いただいた。今後も教区報へ関連記事掲載を継続する。

東北新生園 松丘教会へも継続訪問する。

・今後平賀司教が担当される「子どもと女性の権利擁護のためのデスク」の活動と連携したい。

・私、園部は20年間この活動をしてきたが、10月1日付で御供真人氏と委員長を交代する。

(3) 仙台教区サポーターセンターから(濱山麻子氏)

・7月27日付で司教様より基本計画第4期計画「新しい創造」が発表され、より一層仙台教区の皆様の方が必要と強調された。今後も皆様と共に歩んでいきたい。活動として次のようなことを行っている。

・ベース・デスク運営のための事務的サポート・広報活動の強化

復興・支援活動ニュースレターを月に一度発行。小教区活動に特化した「4↓6・45通信」は8月発行第40号でニュースレターと統合。

・今後の課題：仙台教区内の小教区・修道会など、「地元の方」をつなぐ。

仮設住宅から災害公営住宅への移動、福島での避難指示解除による住民の帰還等によるコミュニティ再形成のため、支援必要性はますます高まって

いる。最後まで残るのは地元の方々の情報交換しながら、意見を出し合い、参加いただいて、末永く続けていける体制づくりにつなげていきたい。

(4) 教区広報委員会から (岩井誠氏)

・教区報順調に推移、奇数月第一日曜日発行。

各地区の報告のために「地区便り」を設けた。

・教区HPサーバーを安価な大容量(1TB)サーバーへ変更した。

(5) WYDクラフ大会は、ニコ師を団長に仙台教区から2人の青年が参加した。

(6) 各地区報告の後、閉会。

定例会前日までに研修会を開催することを確認した。

第2議案、施設整備協力制度要綱の改定について、川井田元氏(第8地区)により提案説明が行われた。

地区制の導入により、教区を4県ではなく8地区に分割したことに関連して、施設整備協力制度要綱の各項目の「4県」の記載を「8地区」に変更することとした。

さらに、運営委員について第8条(1)信徒代表(8地区)各地区から選出された各1名。

当制度利用について、第18条(3)地区からの推薦書と変更することになった。施行日は2016年9月22日即日となった。

その後、連絡報告として、

(1) 仙台教区滞日外国人司牧について(担当司祭ガクタン師、担当職員クレア氏)

ガクタン師不在のためエメ師より報告された。

・外国籍の方々が増え続けており2年前の数字で373名。私たちはどう接するべきか、外国人司牧の課題である。

・歓迎し、笑顔で挨拶、ニコニコする言葉がでずとも表情・目つきが大事。温かく迎え入れられたと思えばホッとする。

・日本の教会の中に受け入れること。一緒に新しい教会作りをしたい。日本語ができない子どもがいれば手伝うことも可能。何かあればガクタン師

父にもメール等を通してつないでいただきたい。

(2) 「人権を考える委員会」から (園部英俊氏)

・人権を考える委員会のホームページを年内目標に開設したい。

開設の目的は広報、啓蒙、電子資料の公開、特にハンセン病問題の資料の電子化。

・滞日外国人支援：ヘルプデスクの活動は少し停滞気味。デスクをPRする各国語パンフを作成しインターナショナルミサや各教会で配布する。

外国籍信徒との顔の見える関係を築くため外国籍信徒リーダーと意見交換会を開催した。

11・4 聖母訪問会総長来訪

6 仙台病障連研修会

8 司祭評定例・教区司祭団役員

9 部落差別人権委・事務局会議

10 社会司教委員会

12 スペルマン病院

13 特別聖年閉幕式

15 17日韓司教交流会

19 宣司評・役、

聖霊刷新グループ

20 王であるキリスト

25 12・3 聖地巡礼

4 宣教地召命促進の日

5 6 仙台教区司祭の集い

9 部落差別人権委・定例委員会

13 司祭評役・教区司祭団役員

14 臨時司教総会

15 司教の社会問題研修会

17 カリタス原町ベース落成式

21 聖ドミニコ小

25 主の降誕

司教日程

11月・12月

問われる移住者と難民・いつくしみの福音

インターナショナルミサ



子どもたちと祭壇を囲んで主の祈り

9月25日(日)、世界難民移住者の日、元寺小路教会に多くの外国籍信徒の方が集い、平賀司教の司式でインターナショナルミサが行なわれた。

スペイン語の入祭の歌から、第一朗読は韓国、第二朗読はスペインの信徒により、また答唱詩編ではアメリカの方が、たどたどしい日本語で懸命に詩編を歌う姿がむしろ感動的でさえあった。

説教の冒頭、平賀司教の口から「私は、今朗読されたいずれの言葉も解しません、そこには愛の言葉として十分に私たちの心に響くものがありました」とのコメントがあった。

また、世界の現実を目を向ければ2015年末、紛争や迫害を逃れて家

を追われた人々は6530万人に達し、「すべての人が世界のどこにいても、そこが自分の家であり、人類家族の一人として共に生きられるよう祈りましょう」という「世界難民移住移動者の日」委員長松浦悟郎司教のメッセージを紹介し、「いつも難民に心を寄せ、命の喜びができるよう祈りましょう」と呼びかけた。

厳しい現実はあるものの、恒例となつた美しい民族衣装を身に着けた子どもたちが司教と手をつなぎ、祭壇を取り囲んで「主の祈り」を唱え、また大人たちに交じって共同祈願を唱える等、終始なごやかな雰囲気の中でのミサだった。

久しぶりの好天にも恵まれ、聖堂の前庭で軽食をとりながら歓談を楽しんだ。

子どもたちは、パーティーでの余興として、フィリピンのスイカ割り? 「ピニャータ」を楽しんだ。



ピニャータ・籠の中はお菓子

台風10号による浸水被害 久慈教会(第2地区)

大型台風10号は、8月30日、太平洋岸から岩手県を直撃した。

久慈市は、市内全域に避難指示を発するほどの豪雨に見舞われ、いたるところで浸水した。

これにより、市中心部にあるカトリック久慈教会は、敷地内に2m、建物内は、床上1m40cmが浸水した。

3日間浸水したままで、3日目の朝、やっと教会に駆けつけることができた。

教会、司祭館、幼稚園(現在閉園)の建物は、泥にまみれ、祭壇も倒れ、ミサ典礼書、オルガン、聖歌集など、ほとんどが水につかり使用不能となつた。

9月3日には、八戸塩町教会、鮫町教会、聖ウルスラ修道院、カリタス釜石、大船渡ベースから、復旧支援に駆けつけてくださった。さらに、県、市からのボランティアの支援を受け、汚泥の除去と、建物内の廃棄物の処理をすることができた。

教会の建物は半壊、幼稚園の建物は、取り壊すことになった。

教会は、壁面と床面の張替が必要となり、費用は、5百万円程、幼稚園の取り壊しに4百万円程が掛かりそう。

教会内の備品では、使用可能なものは、洗浄した椅子ぐらいで、他は、新規に購入しなければならない。



玄関・郵便受けまで浸水

教会の維持管理費は、前任のトマ神父が残してくれたおおよそ8百万円があるが、不足分については、教区の支援をお願いしたいと考えている。



聖堂

今まで、教会があることを当たり前に思い、教会の維持管理や修繕など自分たちでやっていたという力が育つていなかったことに気づかされた。聖堂を復旧し、再びミサに参加し、ご聖体をいただける日を待ち望み、多くの方々のご支援に感謝し、これに無にしないよう、今後とも努力していきたいと思っている。

久慈教会信徒会長 高橋和郎

次世代のことを考える

「子孫に美林を残す」という言葉は、苗木を育てるには長い年月を要することから、遠い将来にはじめて役立つような活動の比喻として使われる。実際、人工的な美林の代表とも言える奈良県の吉野杉は室町時代から、静岡県の天竜杉は江戸時代からの植林とのこと、共に長い年月の結果である。

ネイティブ・アメリカンの一部族に1万年以上も伝わってきた口承史には、「子どもたちの子どもたちの子どもたちのために」という表現がしばしば現れる。何世代も後の人たちを考えて、いまするべきことを決断し、口承に加える内容を皆で決めていく。口承を最後に受け継いだポーラ・アンダーウッドは、全世界の人たちに伝えたいという希望を持って文字化した(邦訳:一万年の旅路)。

情報化の時代となり、インターネットやスマートフォンで新しい情報が次々と入ってきては積み重なっていく。重要な事柄を常に留意するにはどうしたらよいのだろうか。次世代に残すべき大事なことは何かと問い直し、確かに伝える術を見出したい。

地球を大事にする会 猪岡 光

教区研修会「家庭における私の信仰」-次世代に伝えること-

第3・第4地区研修会

7月18日、四ツ家教会において、Sr.景山あき子さん(援助修道会)「写真」を講師に招いて開催されました。



司祭インセン、田中、高橋、川崎、信徒、総勢125名(第3地区94名、第4地区31名)の参加がありました。

あり、講話は体験談を交えて分りやすく、質疑も活発で充実した研修会でした。

講話の要点は次のようなものでした。

①次の世代に伝えるためには、時々子どもとともにささげる「ミサ」を行うように努め、なるべく子どもが来やすい曜日や時間にミサをする工夫が求められます。②大人に対しても信仰を伝えていくことが必要で



すが、その中心は「いつも喜んでいての幸せ」を伝えることが大切です。③その幸せとは、祈ることのできる幸せであり、その究極の祈りは「御心が行われますように」という祈りです。④日常の信仰生活のなかで「人に対する感謝」も大切で「ありがとう」「ごめんなさい」を心から言えるようになりたいものです。⑤カナの婚礼でマリア様は「この人(イエスの言うとおりにしなさい」と言いました。⑥ギリシタンは殉教の時代に神の「愛」を「御大切」という言葉で伝えてきましたが、わたしたちも信仰の難しい現代にあつて、関わりをもつ人びとに対し「御大切」の心をもつて接していきたいものです。(四ツ家教会 菅野 耕麿)

③その幸せとは、祈ることのできる幸せであり、その究極の祈りは「御心が行われますように」という祈りです。④日常の信仰生活のなかで「人に対する感謝」も大切で「ありがとう」「ごめんなさい」を心から言えるようになりたいものです。⑤カナの婚礼でマリア様は「この人(イエスの言うとおりにしなさい」と言いました。⑥ギリシタンは殉教の時代に神の「愛」を「御大切」という言葉で伝えてきましたが、わたしたちも信仰の難しい現代にあつて、関わりをもつ人びとに対し「御大切」の心をもつて接していきたいものです。(四ツ家教会 菅野 耕麿)

第6地区大会(教区研修会)

9月8日(日)、元寺小路教会で開催。約300人が参加。

テーマに沿って、3名が体験報告。

①松枝恵子さん(元寺小路教会)

私は、家庭で、親戚を含めてもただ一人の信徒。21年前、娘が小学校1年生の時に受洗した。子どもを育てるために、どうしても神さまの助けが必要だとの思いからだった。主人を説得したが、理解を得られず、娘と一緒に洗礼をと思ったが、主人に反対された。幸い、子どもとは信仰について話し合うことが出来た

が、主人とはほとんど信仰の話はしていない。しかし、彼は、車の中に線香を入れていて、仕事の上で困難にあつたとき、先祖の墓参りをして



体験報告を聞く

いる。自分の力では解決できないときに、さらなる大きな力に頼るという心があつたことを知り、ほつとした。

葬儀ミサは、キリスト教を知らない人に信仰を伝えるとても良い場であると思う。親族のひとりでも、私の葬儀ミサに来て教会の良さを感じてもらったらよいと思っている。

②岡田謙一さん(八木山教会)

父も母も信者で、子どものころは、日曜日は、朝のミサと夕方のベネディクション(聖体賛美式)と2回教会に行つた。息子2人は、洗礼を受けているが、教会には来っていない。息子の結婚式は、教会でと奨めて北仙台教会で挙げた。神父様からは「あなたの息子さんは、ちゃんと信

仰を受け継いでいますよ」と、言われホツとした。

「愛といつくしみがあれば、そこに神がおられる」、これは、キリスト教に限ったことではない。父は、名を長蔵と言ひ、周りの人から「仏の長さん」と呼ばれていた。私も人と接するとき、いつも笑顔で、その人の目を見て接するように努めている。

③吉原美菜子さん(一本杉教会)

私は、しばらく教会から離れていた。聖ウルスラ学院に幼稚園から高校まで通っていた。1990年に受洗した。夫は、理解があるが、親族からは、先祖の墓を守るよう言われて、教会に行くことを止められている。

日曜日にミサに行くことは、主婦にとつて苦勞が多い。たまに一本杉教会に行くと「あら、しばらく」などと温かく声をかけてもらえるが、後ろめたさを感じる。シスターから「私たちが、教会に来られない人のために祈っているから、あなたは、今の生活に頑張りなさい」と、言われ心強く思った。

教会のお知らせや、インターネット等で教会の情報を得られるのも心強く思う。

久しぶりに教会に来た人にも、温かく声をかけて欲しいと思う。

④講話「生活と信仰の統合」

講師 鈴木隆氏(東京・荻窪教会)

霊性センター「せせらぎ」スタッフ・前「福音宣教」誌編集長 困っている人、苦しんでいる人に寄り添って共に歩んで行くことを私の使命と考えている。



講師 鈴木 隆氏

この社会をキリストの望む姿に変えていくことが信徒の使命である。神が存在していることを前提にして生活を組み立てることで、喜びと希望が湧いてくる。

朝、今日一日を神様にささげる決心をし、一日の終わりに糾明する。心のリセットボタンを押して寝る。それは、目覚めた時に素直な心で神様からの恵みを受け取るため。そして、毎日、神さまと対話しながら生活していくことで、生活と信仰の統合が出来る。

⑤第6地区の教会紹介

映像を映しながら、各教会の紹介が行われた。

・午前中、信徒ホールで子どもたちの集会をし、そこで制作したものをミサで奉献した。

午後、平賀司教主司式のミサをもつて地区大会を終了した。

第7地区大会(教区研修会)

9月18日、福島市の野田町教会にて、第1回地区大会と研修会が行われた。

第7地区は、会津地区と福島地区の6つの教会と3つの修道院で構成されている。午前10時の開会に合わせて、およそ120名が参加した。

午前の部では、濱口秀昭神父(サレジオ神学院院長)「写真」を講師に招いて「家庭における信仰教育」についての基調講演が行われた。



濱口師の育った環境とともに、児童施設や神学院の活動で感じられたことを柔らかい口調でユーモアを交えながら話された。聴く者の心をとらえて離さず、心の琴線にふれる言葉の数々に感動した...と多くの感想が寄せられた。



午後は、各教会の代表5人が「家庭における信仰生活」についての発表。それぞれの家庭の系譜とともに信仰生活の在り方を説明し、「祈りの環境を整えることが大切である」との結論に達した。

濱口師からのアドバイスをいただき研修会を終了。アンケートでは様々なケースをふまえて、さらに内容を深める機会が必要であるとの意見があった。

富山 幸子(野田町教会)

第8地区大会(教区研修会)

9月19日(月)、第8地区大会が郡山市のさんかくプラザで開催された。

地区制になって初めての大会だったが、今回は教区研修会と合わせての開催となった。



午前中の第1部は教区研修会、テーマ「家庭における私の信仰」

をもとに、コングレガシオン・ド・ノートルダム修道院のSr.津田和加子さん「写真」を迎え「信仰を伝えるということ」をテーマに、シスターの経験と教育者の立場から具体的な話がいった。

午後の第2部は第8地区の集いとし、各小教区の紹介と聖歌隊による歌の発表、特に今回はフィリピン・ベトナムの方々の自己紹介もあり、和気あいあいとした楽しい時間を過ごすことができた。



渡邊 久男(郡山教会)

その後小野寺洋一司教総代理のもと約85名の参加者が心をひとつにして賛美と感謝のうちにミサを行い、2年後のいわきでの開催を約束し有意義な一日を終えることができた。

トピックス

十和田教会への巡礼

弘前教会

10月10日(月)弘前教会では、同じく巡礼聖堂に指定されている十和田教会への巡礼を実施しました。

五所川原教会からも5名参加し、全員で40名の参加となりました。当日は素晴らしい十和田教会御聖堂でミサも行われ、バスの中では「いつくしみのチャプレット」を用いて祈り、ロザリオの祈りを唱え、実り豊かな巡礼となりました。



十和田教会

ティーパーティーで「寄り添い」

東仙台教会婦人部

私たちは行事の一環として平成8年11月より、特別養護老人ホームの暁星園でお茶会形式の「寄り添い」の活動を始めました。それから3年後、パルシア創立時にここでも要請をいただき、年2回ずつながらティーパーティー活動を始めて20年が経ちました。毎回お一人おひとりに声をかけながらおもてなしする中で、おいしいと優しい笑顔で応えてくださり、また話も弾みます。私たちも和みながら「共に生きる」のことが心にしみてきます。このような時を過ごせて神に感謝です。

私たちは「開かれた教会」のことが大切で、他教会の方々、煎茶・抹茶の先生方、この活動に賛同くだ



パルシアでのティーパーティ

さる市民の方々と共に「野のゆり会」の名で歩んでまいりました。お茶を点てる人、お菓子を盛る人、お運びする人、介助する人、そして陰でお茶碗を清める人と、それぞれが自分



東仙台教会婦人部メンバー

訃報

スール・アンヌ・マリ・ドゥ・ロザリー ap

氏家 登久

ドミニコ会



雪の聖母修道院
1919.3.10 誕生

1939.10.1 盛岡ロザリオの聖母
修道院入会

1992.10.10 初誓願

1994.12.8 荘厳誓願

2016.10.18 帰天(97歳)

改築落成式 大船渡教会

「3・11」から5年と7ヶ月が経ちました。私たち大船渡教会は大きな被害を受けましたが、同時に、実に大きなお恵みをいただいたと感じています。

それは、フイリピンからはるばる気仙地方に来ていたお嫁さんたちが教会に来るようになり、信仰の仲間が一気に倍になったことでした。そしてもう一つのお恵みは、その仲間たちと集える広いホールがこの度立派に完成したことです。震災後、狭い聖堂が信徒で一杯になることは嬉しい悲鳴でしたが、困ったのは御ミサの後、狭い図書室に信徒が入り切らず、フイリピンからの奥さんたちは遠慮して外に出ておしゃべり

をしていたことでした。そのため「原住民の気仙」などの交流がなかなかできなかったのです。そしてもう一つ困ったのはトイレです。男女兼用のトイレが1カ所あるだけでしたので、不満の声が上がっていました。

そんなこんなの不便不満を解消するのは、われわれ「原住民」が少しでも若くて元気な内にと、果敢に実行に移したのです。実行に際して一番の課題はもちろん資金でした。大船渡教会は献堂以来60数年になりますが、先輩信徒たちは献堂当時から、将来の教会建設資金として毎月150円ずつ積み立ててきたそうです。ラーメンが1杯30円の時代からのことです。そうして60数年にわたり積み立ててきたお金に、今回の震災で頂いた義援金を合わせなんとか資

金を調達することができました。すでに完成した小聖堂や坂道工事と合わせ、これで大船渡教会の復興工事はすべて完成しました。それもこれも、震災以来仙台教区・大阪教区はじめ実にたくさんの方々から、物的・資金的な支援、そしてそれにもまして精神的な支援やお祈りを頂いたお陰と私たち信徒一同心から感謝しております。

これら皆様から頂いた恵みに応えるためにも、私たち大船渡教会の信徒一同、これからも心を合わせ、地域に溶け込み、地域に愛される教会になってゆきたいと心を新たにしております。聖堂の落成式は、8月28日(旦)、に行われました。

大船渡教会 教会委員会代表 熊谷雅也

ハンセン病問題と仙台教区 人権を考える委員会

永遠のいのちを

滝田十和男(とわお)さんが帰天されました。滝田さんは信徒会長として松丘教会を支え、フランシスコ第三会員として信仰と奉仕の道に生きてこられました。毎朝6時に白川さんと聖堂で必ず誰かのためにロザリオの祈りを捧げ、主の十字架を…という聖歌を歌っておられた、その姿が忘れられませんか。入所者自治会誌「甲田の裾(こうだのすそ)」の編集長として活躍され、ハンセン病療養所の歴史にも詳しく、多くの資料を残され、短歌や作詞作曲でも多くの作品を作られました。松丘に関することは滝田さんのお話や資料で学ばせていただきました。過酷な隔離政策や病の苦しさを

の中でも、信仰と信念で最後まで生き抜かれた滝田さんの永遠の安息をお祈りします。

滝田さんが34年前の1982(昭和57)年に編集された「松丘カトリック教会宣教50周年献堂25周年記念誌」の中に、「永遠のいのちを」という文章を書かれております。ぜひ皆様にもお読みいただきたく、ご紹介します。

永遠のいのちを

イグナチオ滝田十和男

「神はあわれみの心から、わたしたちを聖霊によって生れ変え、新たにする水とおして救ってくださった。この聖霊を、わたしたちの救い主イエズス・キリストとおして、わたしたちの上に豊かに注いでくださった。これは、わたしたちが、キリストの恵みによって義とされて、希望のうちに

永遠のいのちを継ぐ者となるためである。」(テトス3・5・7)

私が初めてカトリックに心を向けた動機となったのは、それは終戦の日の前日に亡くなられた信徒の小見(おみ)さんと云う人の、火葬係として作業に出された時に受けた感動からであった。小見さんは腸チブスを患らい、隔離病棟で亡くなられたのだが、玄関の所で終油の秘跡を授けて帰られる小野神父様と出会った。

隔離病棟は畑の中にあつて、普段は誰も住んでいないため障子は破れ、使っていない部屋などはクモの巣が張つて、怪談に出てくる化物屋敷そのものの様相を見せ、悪臭が湛つて人が好んで入り込むような場所ではなかった。小見さんは、汚れた布団の上に痩せ細つてひとつまみの小さな遺体となつて

横たわっていたが、その死顔は安らかで、此の世の苦しみから解放されたばかりの柔和な表情をしていた。入園者の看護婦が一人居るだけの隔離病棟の一室で、臨終を終えた小見さんを見舞つたのはカトリックの司祭だけだったことも、何時までも私の脳裡から離れなかった。

〈原文のまま〉(つづく)
人権を考える委員会 御供真人



松丘教会



小聖堂には山浦玄嗣さんの手になるステンドグラスも飾られ、とても親しみやすい雰囲気を出しています。



可動式の扉で仕切られた聖堂とホールは、多目的に使うことができるようになりました。



平賀司教を囲んで104人の参列者とともに記念撮影。遠くは和歌山から塩田神父やルド神父も駆けつけてくれました。

第29回仙台ロゴス研究所公開講演会

「釜ヶ崎で福音書を読む」
ホ・ロゴスって誰のこと？

講師 本田哲郎神父

10月10日(月)、北仙台教会信徒ホールで開催された講演会には、100名程が参加し、本田神父の飾らない本音の話に聞き入った。

私は、カトリックの家族で育ち、子どものころは、毎日ミサで侍者をしていて。周囲の人からは、「あんたは神父になるんでしょう」と言われ、いつも「よい子」を演じていたものだから、そのまま神父になった。

フランススコ会の日本管区長になったとき日本各地の会員を訪問して回った。

大阪の釜ヶ崎に行ったとき、聖書の読み方が全く変わった。変えられたと言った方がよい。

信仰は努力することで深まるのではない

教会や説教で変えられることはない。

人との出会いで変えられる。

信仰は、行動を伴わなければならない

主日のミサに欠かさず参加しても、いくら祈っても、何も変わらない。祈って、行動を起こ

【講師紹介】本田哲郎氏は、1942(昭和17)年、台湾・台中市生まれ。65年上智大学神学部卒業。フランススコ会に入会。71年司祭叙階。89年大阪市西成区あいりん地区の社会福祉法人ふるさとの施設長、98年退任。91年より、大阪釜ヶ崎にて、日雇い労働者に学びつつ聖書を読み直し、また「釜ヶ崎反失業連絡会」などの活動に取り組んでいる。新共同訳聖書の編集委員。フランススコ会聖書研究所で、フランススコ会訳聖書の刊行にもかかわっている。

さなければ、信仰とは言えない。教会はそれなりのエリート集まり。困難、くやしき、悲しみ、痛手を負った人はあまりいない。

釜ヶ崎のホームレスにおにぎりやみそ汁を配っていると「兄ちゃん、すまん、ありがとう」と言っ受けてくれる。その後、「こんな姿、娘には見られたくないなあ」と、ぼつりと言った。

この一言で、私は変えられた。それまで、私は、「いい人」でいたい。人から褒められたい。だから、「飢えている人に食べさせ、渴

いた人に飲ませ」いい事をしているんだと思っていた。でも、それは、私の勝手な思い込みで、どこか上から目線でやっていた。

キリストは、炊き出しをする側にはいない

キリストは、炊き出しに並ぶ人の側にいる。小さくされた人、苦しみ、悲しみ、痛み、差別

された人の側に立って見なければならぬというところに気がついた。視座を変える。上から目線の視座から下にいる人の目線で見ること、



炊き出しに並ぶキリスト

読み方が変えられた。メタノイア(悔い改め)は、痛み、苦し

み、ねたみ、からの転換。自分の側から見るのではなく、相手の側から見るこ

と。酔っ払いのホームレスが、私に「キリスト教は人殺しや」と言った。良かれと思っ



「わたしが飢えていた時に食べさせてくれた」というのは、「自分で食べられるようにしてくれた」というのでなければならぬ。

「アガベ」を「愛」と訳したことで、信者は苦しめられた。キリスト教は、「愛の宗教」である。

「互いに愛しあいなさい」。「隣人を愛しなさい」と言われる。見知らぬ人を愛せま

るか? 「あなたの敵をも愛しなさい」。そんなことは無理です。結婚した夫婦でも、長年一緒にいたら、愛は

つきますでしょう。できないことを、教会は「やれ」と言う。やれないのは、信仰が足りないからだと言われる。

だから、「やれない」のに、「やれる」ふりをする。これが怖い。無理して、努力してなにかされると、釜ヶ崎

の人たちにとっては、これほど辛いことはない。江戸時代のキリシタンは、「アガベ」を「たい

いせつ」と言っていた。「アガベ」は、「人を大事にする」ということで、キリスト教は「人を

大事にする」宗教だとわかれれば、ずっと楽になる。「相手の尊厳を受け入れ、その人の、意識を

尊重する」。これが人を大事にするということだ。

「神の国」は、天国のことではない

神の国は、この世に実現する、正義と平和と喜びである。

「正義」は、正しいか、正しくないかということではない。抑圧からの解放、自分らしく生きるということである。

「平和」は、傷ついたところがどこにも残っていない状態である。迷える一匹の羊を、探し出し、肩に担いで、99匹の群れに戻してやる。そこに平和がある。

「喜び」は、だれにも目をかけられない老人を世話し、少しでも喜んでもらえるようにすること。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」、これは逆で、「泣く人と共に泣き」その人が「喜ぶときに、共に喜ぶ」のでなければならぬ。

聖霊は、釜ヶ崎で働く

聖霊は、痛み、苦しみ、くやしき、貧しさの中で働く。

ホ・ロゴスとは、誰のこと?

初めに。みことばがあった。

みことばは神とともにあった。

(ヨハネ福音書1:1-3)

ここで言う「みことば」は、受肉したイエスを指している。

神の思いは、イエスによって「ことば」で示された。

見えない神の働きが、見えるようになった。

その方こそ、ナザレのイエスである。

この福音は、次のように表すとわかりやすい。

はじめから、「ことば」である方はいた。

「ことば」である方は、神のもとにいた。

「ことば」である方は、神であった。

この方は、はじめから神のもとにいた。

講演を聞いて、本田神父の率直な語り口に魅了され、「目から鱗」の感があつた。自分の信仰生活の中で「視座」を変えなければならぬと痛感した。キリストがどんな気持ちで、その時代の弱い立場の人たちと接していたかがわかった。など感想を分かち合っていた。

あけの星会巡礼の旅 福島・野田町教会へ

再会なのです。

野田町教会の司祭でいらしたラトゥール神父様と仙塩地区連合婦人会

9月13日(火)、指導司祭ラトゥール神父様と仙塩地区8教会からの参加者94名で野田町教会を訪ねました。ミサは、エメ神父様との共同司式で、野田町・松木町教会からの信徒さんも一緒に聖堂いっぱいになり、心ひとつになる厳かなものでした。

ホテルでの昼食には両教会からも参加をいただき104名となり、各テーブルでは楽しく交流の輪が広がり実り大きな一日となりました。

「皆様をお迎えして」

野田町教会 富山 幸子



野田町教会巡礼のミサ

その日、私たちは小雨の降る教会前の道路をじっと見ていました。エメ神父様が今春におっしゃった「百万本のバラの花がやってくる」日だったからです。エメ神父様は、昨年の4月に着任されましたが、仙台で過ごされた17年間に培われたバラの花々との

「あけの星会」の皆様をお迎えできたことは、松木町教会、野田町教会にとつて大きな喜びでした。御ミサでは若々しく明るい歌声が祈りとなつて御聖堂に響き、にぎやかで和やかなランチは笑顔に満ちて、あけの星会の歴史を受け継がれる組織力とパワーに圧倒されながら、またたく間に時間が過ぎてしまいました。

典礼聖歌を作曲された高田三郎先生の作品、合唱組曲「心の四季」の中に「愛、そして風」という名曲があります。イエス様の愛の風に吹かれて、皆様から学ばせていただいたことをくりかえし味わいながら、このお恵みを活かしていくすべを見つけていかなければならないと思いました。

百万本のバラの花束・感謝のうちに受け取りました。ありがとうございました。

仙台広瀬川キリシタン殉教碑

50年後の人々へこの碑を残そう

カトリック仙台壮年の会

仙台広瀬川大橋たもとに立っている殉教記念像は今から約45年前(1971年9月)完成し、ポルトガル駐日大使の列席の下除幕式が行われた。それ以来この記念像に宮籍の手が入れられた記録はない。そのため



台座のひび割れ



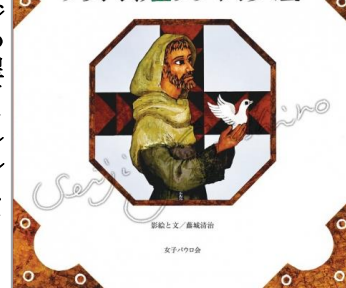
振込先：郵便振替口座
02240 - 6 - 140914
カトリック仙台壮年の会

か像自体は問題ないように見えるが、台座部分に、ひび割れ、塗装の劣化が見られ、早急に手入れが必要との専門家の意見。この記念像建設を発案し事業推進を担ったのは当時の「仙台地区壮年連盟」で、その意志を受け継ぐ「仙台壮年の会」は本年4月の総会で、修繕工事に向けて動き出すことを決めた。さらに、殉教碑の説明文を、外国の方にもわかるようなプレートも取り付けたいと考えている。

この計画実現のためには教区の皆さんのご協力をお願いしたいと考え、募金をつのりたと思います。近日中に、各教会に募金趣意書をお送りします。どうぞよろしく願います。

新刊紹介

アッジの聖フランシスコ



アッジの聖フランシスコ

影絵と文 藤城清治／発行 女子パウロ会／定価 680円＋税

21年前、自然破壊が進み、心ある人々は、破壊ではなく、自然の中にも生きることに目覚めていました。そういう時代の流れの中で、いつも注目を浴びるのは、アッジの聖フランシスコです。こうして、画家であり、作家である藤城さんに本の依頼がきました。しかし、展覧会や影絵劇などで忙しく、聖フランシスコの制作に専念することができませんでした。それから21年、92

歳になった著者が「これは、私の影絵人生の集大成」とおっしゃる本書が完成しました。

本書は、聖フランシスコの生涯の主な場面をたどりながら、「教会を建て直さなさい」という神のみ声を聞き、次第にフランシスコを慕って集まってくる兄弟たちと共に、「小さな兄弟たちの修道会」となっていく姿。その中で、いろいろなエピソードが取り上げられていきます。回心したオオカミの話、聖女クララとの出会い、小鳥に説教するフランシスコ、グレッツオでの馬小屋でクリスマスをお祝った話、太陽の賛歌、フランシスコの帰天など、どの場面もゆっく時間をかけて見ていたい、ページを広げていたいと人の心を引きつける繊細ですばらしい影絵です。

環境保護の聖人であり、現教皇フランシスコが愛し、尊敬してやまないフランシスコを、本書で味わってみるのも芸術の秋、実りの秋にふさわしいかもしれません。

編集後記

2016年度の教区研修会が各地区で行われた。信仰を次世代に伝えることは個々の信仰生活が問われている。各地区での研修が豊かな実りを結ぶことを願いたい。次年度の教区研修会のテーマは、「集会祭儀」に決まった。これも、小教区共同体の成長のためになることを期待したい。

「いつくしみの特別聖年」は、11月20日王であるキリストの主日を持つて終了する。教皇フランシスコは、この特別聖年にあたって、教会が、信徒が、神のいつくしみを、さまざまな

困難の中にいる人びとに見えるかたちで伝えていくことを呼びかけられた。仙台ロゴス講演会で講演した本田神父は、「信仰は行動を伴わなければならない」(P.7)と、第6地区の研修会で、鈴木隆氏は、「信仰と生活の統合について」「社会をキリストの望む姿に変えていくことが信徒の使命である」(P.4)と、話された。神のいつくしみを社会の中で具体的なかたちで現していくことは、これからも続けられなければならない。

今回も、教区報に、原稿や写真を送ってくださった方々に感謝。(岩井)